

関係代名詞の制限用法・非制限用法導入順序の妥当性について

ー歴代英語教科書および日本人学習者の習得順序からの検証ー

松岡博信 (安田女子大学)
中村朋子 (広島国際大学)

Abstract This study raises a query about the present situation in which restrictive relative clauses are to be introduced to Japanese learners before nonrestrictive ones. The proposition will be discussed regarding that the introduction of nonrestrictive clauses should be placed earlier in the curriculum of English teaching, based on three viewpoints; historical reviews, complexity of linguistic structures and empirical data analysis.

1. はじめに

日本で現在発行されている中学校英語教科書では、関係代名詞の導入はすべて制限用法から始まっている。そして、中等教育の現場でも、このことは当たり前のように考えられており、この導入順に対してほとんど疑問を持たれていないように思われる。

しかし、制限用法として導入される関係代名詞節は、埋め込み節であり、非制限用法として導入される関係代名詞節を含む文の重文構造と比較すると、より複雑な複文構造を持っている。¹⁾ このことを考慮すると、むしろ非制限用法の関係代名詞を先に導入すべきではないかという疑問も起こる。

それでは、日本の英語教育の歴史において、一体いつごろの時期からこのような導入順が確立したのであろうか。これらの疑問を持つに至って、明治からの歴代の英語教科書を調査し、その時期を特定するとともに、現行の関係代名詞導入の順番が、学習者の発達段階に即した教材配置であるかどうかについて、その妥当性を検証することにする。

2. 研究目的および調査方法

前述した検証のために、以下の調査および議論と実験による分析と考察を行う。

- (1) 明治から現代までの日本の英語教科書における関係代名詞の導入時期を、制限用法と非制限用法それぞれについて明らかにするために、明治以降の英語教科書 14 巻 70 冊のデータベースを綿密に調査する。
- (2) 言語学理論から、関係代名詞節を有する文の中で、制限用法の方が非制限用法のものよ

り複雑で難解な文構造を持つことを論じる。

- (3) 日本人 EFL 学習者にとって重文は習得しやすいが埋め込み文は習得しにくいことを明らかにするために、中学3年生英語熟達度上位者、大学1年生下位者および上位者の自由英作文データの統語分析を行う。

3. 英語教科書に見る関係代名詞の出現についての比較

3.1 関係代名詞の出現頻度

関係代名詞の出現頻度の傾向性は、年代順では、Palmer の *The Standard English Readers* (1926) (以下 *Standard(P)*) を例外として、頻度の高い Dening の *English Readers: The High School Series* (1887) (以下 *Dening*) までと比較的低い『正則文部省英語読本』(1889) (以下『正則』) 以降の2つの時期に大別される。

これら2つの時期の教科書を比較すると、関係代名詞の出現頻度が極端に異なっている。図1の「関係代名詞(種類別)」棒グラフは、年代別の特徴を如実に表している。初期の教科書である Sanders の *Union Series of Readers* (1861) (以下 *Union*)、Bares の *New National Readers* (1883) (以下 *National*)、*Dening* は、関係代名詞の出現頻度が他の教科書に比べて格段に高いことがわかる。

頻度が高いか低いかだけではなく、図2の「関係代名詞(合計)」の折れ線グラフのカーブの様相を見ると、それぞれの教科書が、学習進度に沿って段階的に関係代名詞を導入しているかがわかる。出版年度の古い順に見ると *Union* と *Dening* は「文法無統制型」の特徴を示している。一方 *National* は *Dening* より古い教科書であるにもかかわらず、典型的な「文法統制型」の美しいカーブを描いており、その序文に見られる「“gradation”を意識した編纂の意図」を裏付けており、アメリカの国語教科書として周到に編集されたことがうかがえる。また、これらの教科書とは異なり『正則』以降の教科書は、さらなる統制による「文法積み上げ型」の特徴をよく表した「緩やかな」上昇パターンを有している。

3.2 関係代名詞の出現率

図3の「関係代名詞(総語数に対する比率%)」は、テキスト本文が易しいものから複雑な文構造へ段階的に導入されているかどうかを表している。図2で「文法無統制型」を示した *Dening* は、このグラフでも他の教科書とは異なるケースとして突出していることがわかる。

以上のグラフを基に関係代名詞に関して考察すると、*Union* や *Dening* の英語教科書は、日本人が外国語として英語を学ぶ際に使いやすい教科書であったのか、という疑問が起こる。

また、『正則』については「未習項目をまったく使わず、既習項目だけで教材を編成するという『積み上げ型』を採用し、日本の英語教科書の新しいあり方を示した」(小篠・江利川 2004) とあるように、それまでの輸入教科書へのチャレンジという意図があったことが知られているが、この特徴を今回の調査で、数量的に裏付けることができた。

一方、現在使われている教科書 *Sunshine* は、図1に見るように、関係代名詞の出現頻度が

極めて低く、図3の折れ線グラフでは、1巻から5巻まで緩やかなカーブを見せており、『正則』以来の「文法積み上げ型」を踏襲していることがわかる。

3.3 英語教科書に見る関係代名詞の導入順について

英語教科書のデータベースで、各教科書における関係代名詞の初出時期を、制限用法と非制限用法の両方に渡って調査したら、以下のような結果が出た(表1)。目的格関係代名詞は省略されることが多く、所有格は出現頻度自体が極めて少ないので、調査対象は制限用法も非制限用法も主格関係代名詞のみに絞った。

図1 関係代名詞(種類別)

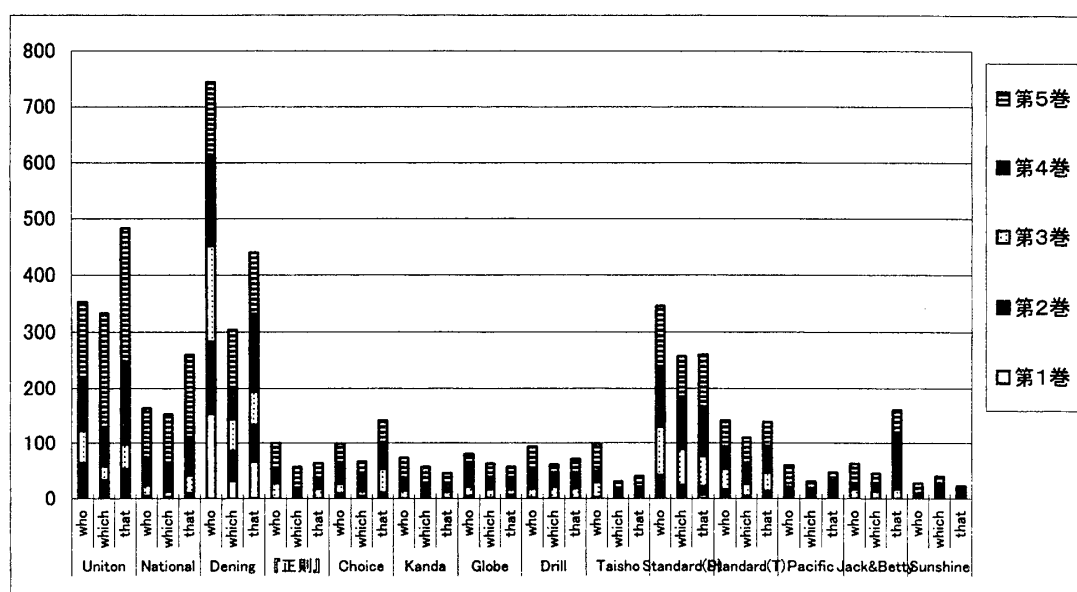


図2 関係代名詞(合計)

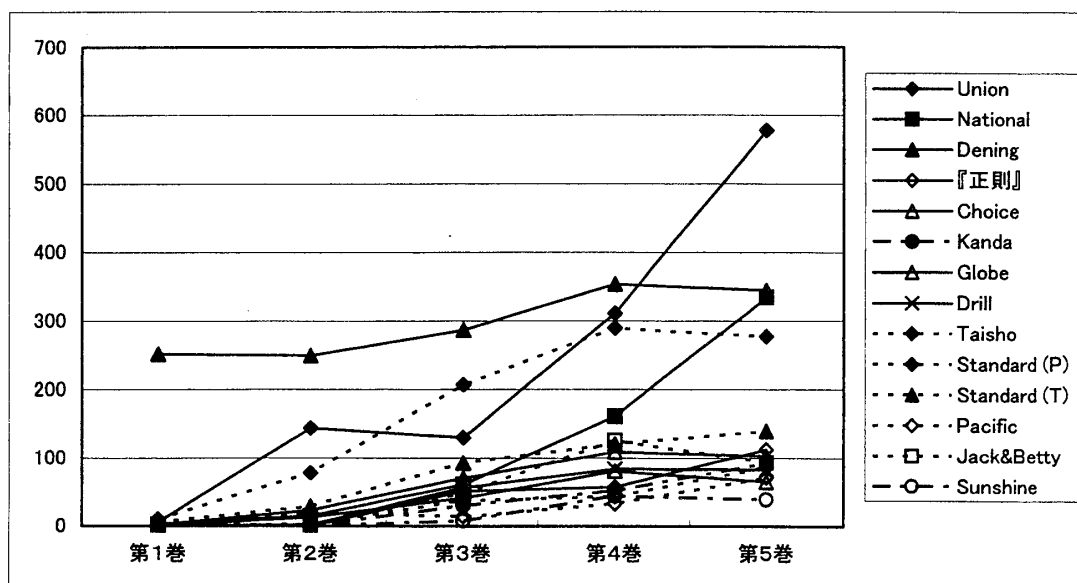


図3 関係代名詞（総語数に対する比率%）

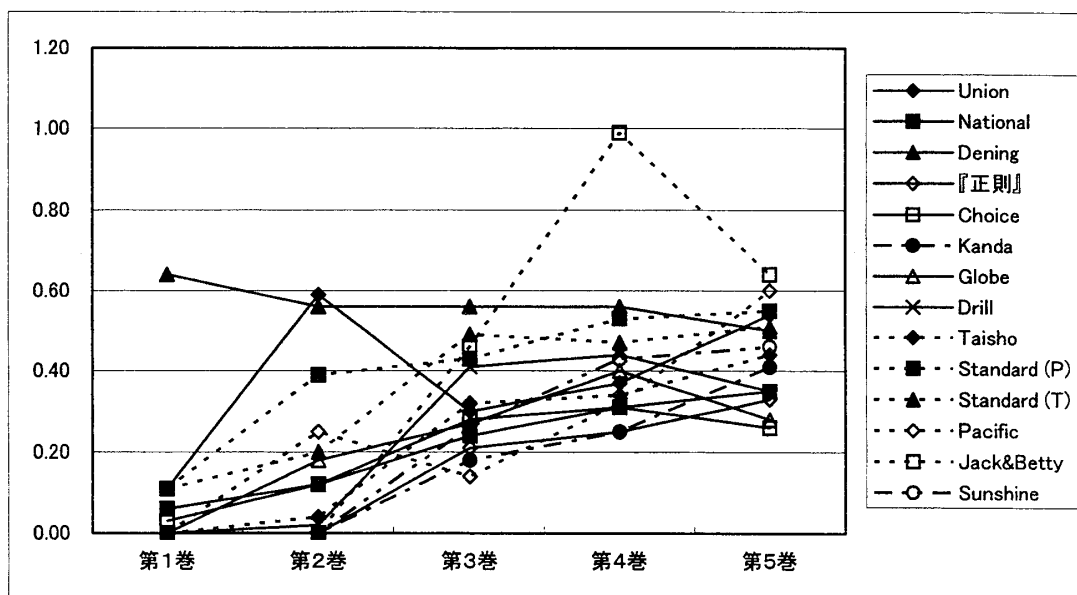


表1 主格関係代名詞の初出時期

関係代名詞	制限用法		非制限用法	
	Who	Which	who	Which
Union	1巻	1巻	1巻	1巻
National	1巻	2巻	2巻	2巻
Dening	1巻	1巻	1巻	1巻
『正則』	3巻	3巻	3巻	3巻
Choice	1巻	2巻	2巻	2巻
Kanda	3巻	3巻	3巻	3巻
Globe	2巻	2巻	2巻	2巻
Drill	2巻	3巻	2巻	3巻
Taisho	2巻	3巻	3巻	3巻
Standard(P)	1巻	1巻	1巻	2巻
Standard(T)	2巻	1巻	2巻	2巻
Pacific	2巻	2巻	2巻	2巻
Jack & Betty	3巻	3巻	3巻	3巻
Sunshine	3巻	3巻	5巻	5巻

表1の囲み文字は、同じ種類の関係代名詞（たとえば、*who*）のうち、同じ巻内でも、制限用法と非制限用法の初出時期が早い方を示している。例えば *Denning* では、*who* は非制限用法の方が初出の時期が早い、*which* はそれに反して制限用法の方が早い。*that* には非制限用法はないので、ここでは表に記載されていない。

その結果、関係代名詞の制限・非制限用法の導入順序に関して一般に考えられてきたこととは異なる歴史的事実の発見があった。*Drill* については、全般的には非制限用法の初出時期が制限用法より早いのである。ところが、*Taisho* は、*who* も *which* も完全に制限用法の導入の方が早い。*Taisho* を境に、それ以降の教科書では、関係代名詞の2種類の用法に関する導入の順番が、制限用法からと、全く定着してしまっている。それが現代の教科書につながる関係代名詞導入の固定観念となっているのである。

4. 言語学の視点からの比較

関係代名詞節を含む文を Tree Diagram によって解析する。Tree Diagram を用いる理由は、イメージ的に文構造の複雑性を理解しやすいからである。複雑な構造を持つ Tree Diagram によって表される文ほど、学習者の認知ストラテジーは複雑なものにならざるを得ず、理解の過程で誤った解釈を起こしやすし、表出の際にエラーを起こしやすいと言える。

制限用法と非制限用法の文 a と b の構造を表している図4と図5を比較すると、a の文の方が階層が深く、複雑な構造を有していることが容易に理解できる。階層の数が増えれば増えるほど、文の解析に困難を来すことは自明である。また、階層数のみならず、a の文構造は、NP の下位に S (関係代名詞節) が生成されるという複雑なものとなっており、よって、言語学的な観点からも、制限用法の方が非制限用法よりも学習が困難であり、非制限用法を学習した後に、制限用法を導入することの方が、より妥当であると思われる。

5. 文章の複雑さの指標

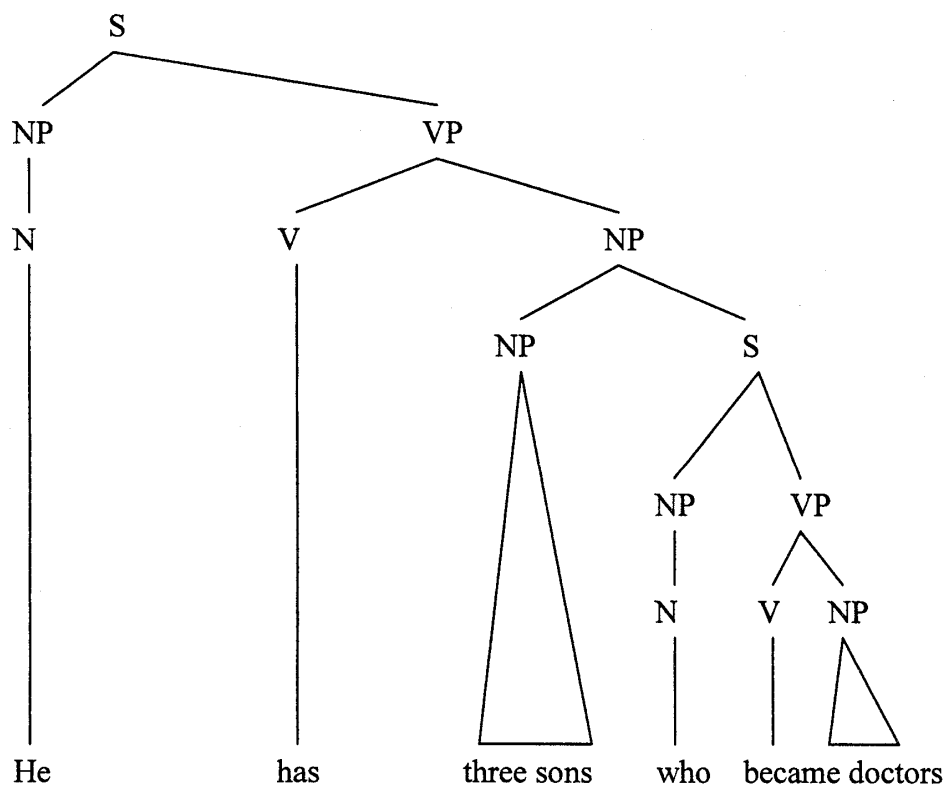
本論では、歴代英語教科書の難易度を測るために、制限用法の主格関係代名詞の出現頻度を算出した。制限用法の関係代名詞は、節の中に節を埋め込む構造、すなわち複文で、文構造上比較的複雑であり、その出現頻度の調査結果は教材本文の難易度をかなりの程度反映していると考えられる。また、非制限用法の関係代名詞は、埋め込み型ではなく、付加的構造を持ち、重文接続詞に代名詞の役割を兼ねる構文である。したがって文構造的には比較的易しく、その出現頻度が教材本文の難易度を反映しているとは言えない。

言語学習者の統語発達を検証するための指標として、T-Units がこれまでに広く使われてきた。T-Units の概念も、埋め込み型の節の使用頻度から学習者の表出する文章成熟度を測る。これは、英語母語話者が書いた作文の統語発達を測る尺度として Hunt が考案したものである (Hunt, 1966)。従属節を含む主文を 1 unit とし、文中の誤りのない節の数の比率を見る方法で、これまでに母語獲得・第2言語習得共に、種々な目標言語でこの分析方法が試み

られ (Bardovi-Harlig & Bofran, 1989; Crooks, 1990; 小泉・山内, 2003), T-Units はデータ分析の一方法として, 一定の信頼度を得てきたと言える。

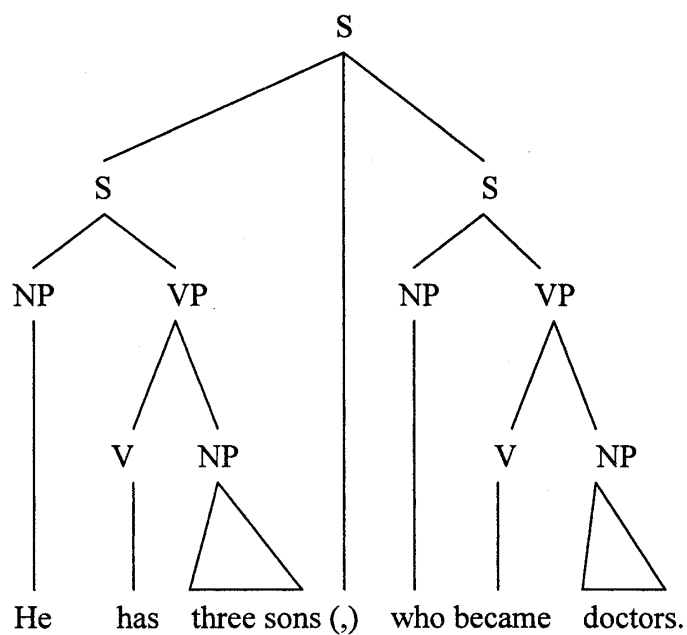
- a. He has three sons who became doctors.

図 4



- b. He has three sons, who became doctors.

図 5



一方、Mandeville (2002) は、節の数を比較するよりも 1 つの T-Unit に使用された単語数を比較するほうが信頼度は高いとしている。日本人 EFL (English as a Foreign Language) 学習者、特に英語の苦手な大学生の自由英作文では、誤りのない節は皆無であると言ってよい。彼らの実態に即した T-Units の活用方法として、Mandeville の分析方法も取り入れ、以下の基準を設けて分析をした。

- ① 単語だけの羅列など、文になっていない部分を削除し、使用語数から差し引いた。
- ② 等位接続詞による重文は 2 つの unit として換算した。
- ③ 副詞節、名詞節、形容詞節などを含む埋め込み文は 1 つの unit として換算した。
- ④ Because など従位接続詞で始まる節だけの分は 1 つの unit とした。
- ⑤ ①を文中の unit 数で割り、T-Unit 内語数を算出し、3 つの学習者群の平均値を比較した。
- ⑥ 文中の統語的エラーは、学習者言語 (Learner Language; Ellis, 1994) と捉え、被験者の意図した文構造がわかる限りそのままにし、被験者が使用した節の数と種類を比較した。

6. 実験

6.1 実験方法

中学 3 年生と大学 1 年生の英語熟達度上位者と、大学 1 年生下位者の被験者群に同じ課題を出し、各被験者群の統語面での発達度を比較した。

(1) 被験者

- ① 大学 1 年生英語熟達度上位者 (n=27)
- ② 大学 1 年生英語熟達度下位者 (n=49)
- ③ 中学校 3 年生英語熟達度上位者 (n=49)

(2) 実験順序

- ① 大学 1 年生英語熟達度上位者と見られる 43 名は実用英語検定準 1 級の長文問題 (2002 年度第 3 回) 2 問をテスト時間 30 分で解答する。
- ② 大学 1 年生英語熟達度下位者と見られる 88 名と、中学 3 年生上位者 69 名は実用英語検定 3 級と準 2 級の長文読解問題 (1998 年秋) を各 2 問ずつ、テスト時間 30 分で解答する。
- ③ 自己紹介文 “Let Me Tell You about Me” を 10 分間で書く。

6.2 英語検定準 1 級と準 2 級・3 級テストのレベル比較

熟達度テストに使用した実用英語検定試験は、日本国内の教室環境で英語を学習してきた被験者にとって、一番なじみやすい英語熟達度テストであると判断し、実験に使用した。また、教育的配慮から 3 級、準 2 級・準 1 級の長文読解テスト問題を各被験者群のレベルに合わせて使用した。

大学1年生熟達度下位者88名、中学3年生69名の英語検定準2級と3級の読解テストの結果から、平均点がほぼ同じになるように49名を選び、2つの被験者群を作った。両群のテストの結果に有意差はなかった。 $(t(96)=0.035, n.s.)$ また、大学1年生熟達度上位者と見られる被験者43名の準1級読解テスト結果を参考に、上位27名を選び、大学1年生上位者群とした。

各英語検定テストのレベル差に関しては、中村他(2004)で検証し、英語検定準1級は準2級と3級の混合テストよりも高度な熟達度を要求するテストであることを証明している。従って、準1級読解テスト上位27名と準2級・3級読解テスト下位者49名の熟達度レベルが一部で重なることはないと判断した。

6.3 データの分析

次に自由英作文に用いられた T-Unit 内の使用語数、使用接続詞と節の種類を分析した。最初に、1つの T-Unit 内に使用した単語数を比較した。3つの被験者群の平均値は、中学校3年生上位者群は、5.755語、大学1年生下位者群は、5.487語、大学1年生上位者群は、7.579語であった。水準数3の1要因(熟達度)の分析では、主効果の検定で被験者間に有意差があった($F(2, 122)=36.910, p<.000$)。下位検定では、大学1年生上位者が T-Unit 内の使用単語数が一番多く、中学3年生上位者群と大学1年生下位者群の間には有意差はなかった。

T-Units による文章成熟度の検定は、1つの T-Unit が、埋め込み文といわれる補文を含んでいるかどうかが決め手になる。従位接続詞を使用して節を作ることができれば、1つの T-Unit 内の単語数は増加する。等位接続詞を使用して重文を書くと、T-Unit は2つに換算され、使用単語数は減少する仕組みになっている。従って、大学1年生上位者群は、他の2つの学習者群よりも従位接続詞の使用頻度が高く、英語文章表現の成熟度が高いと言える。

被験者が使用した接続詞の種類を見ると、等位接続詞はどの学習者群も従位接続詞より使用頻度が高い(図6、表2)。大学1年生上位者においてもそうである。

水準数3(熟達度)×水準数2(接続詞の種類)の2要因の分散分析をしたところ、熟達度と使用した接続詞の種類の両方に有意差が出た($F(2, 122)=100.293, p<0.000$; $F(1, 122)=13.487, p<0.000$)。接続詞の種類において有意な差が出たことは、被験者が重文はよく使用するが、複文は避ける傾向にあることを示している。また、ライアン法による下位検定では、中学3年生と大学1年生下位者の接続詞使用頻度に有意差が認められなかった。

次に、関係代名詞を使用した形容詞節の頻度を比較するために、T-Unit 内に使用された節の種類について分析をした。

図7は被験者が書いた英文の複雑さを示す、埋め込み文の種類の比較である。大学1年生上位者群は文章表現のために、等位、従位接続詞共に、よく使用し、必要な時に取り出して運用できる接続詞の引き出しが多い事がわかったが、埋め込み文についてもそれぞれの種類すべてにおいて、よく使用されている。大学1年生下位者は、埋め込み文の中でも形容詞節を形成する接続詞の使用にとりわけ自信がなく、運用の際には、使用を回避する方略を使う

傾向がみられる。中学校3年生は3年生の後半に関係節が導入される予定で、この実験を実施した5月の段階では未学習であったため、形容詞節の使用はなかった。

図6 接続詞使用頻度比較

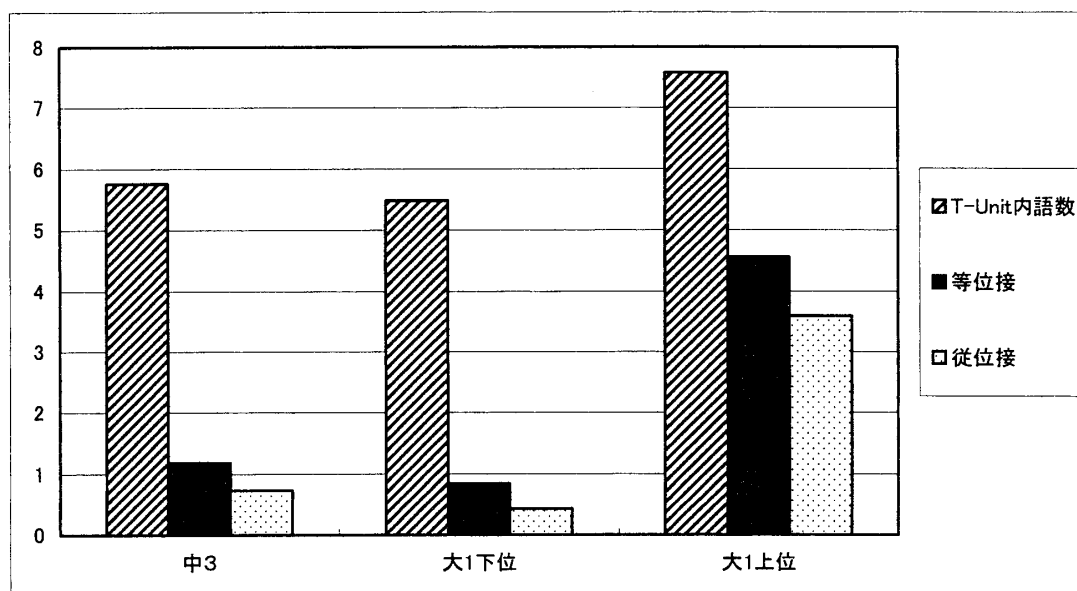


表2 統語に関する記述統計量

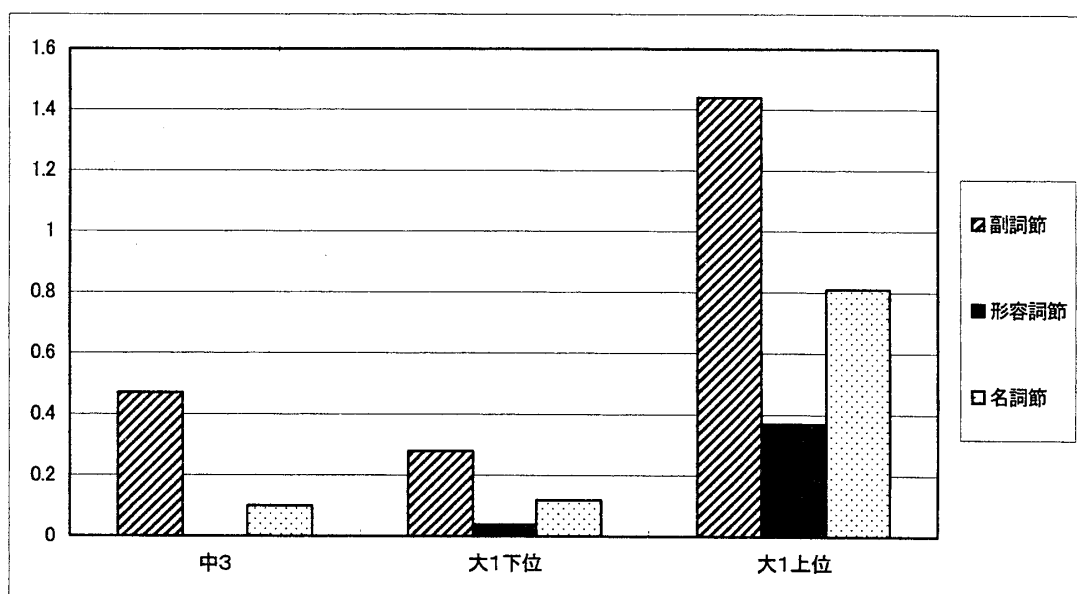
	中学3年生上位 (n=49)		大学1年生下位 (n=49)		大学1年生上位 (n=27)	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
T-Unit 内語数	5.755	0.792	5.487	0.999	7.579	1.458
等位接続詞使用頻度	1.184	1.004	0.837	1.184	4.556	2.78
従位接続詞使用頻度	0.735	0.898	0.429	0.857	3.593	2.082

7. 日本人 EFL 学習者の節の習得順

中学3年生と大学1年生の英語熟達度上位者および大学1年生下位者を被験者群とした実験から、以下の3点が明らかになった。

- ① 学力に関わりなく、等位接続詞のほうが従位接続詞よりも使用頻度が高く、複文による表現を避ける傾向がある。
- ② 埋め込み文（複文）に関しては、大学1年生熟達度上位群に比べると、下位群はその使用が少ない。
- ③ 形容詞節（関係代名詞節）に関しては、大学1年生熟達度上位群に比べると、下位群はその使用が少ない。

図7 節の種類比較



この結果から、文の埋め込み構造を形成する形容詞節が節の中でもとりわけ学習の定着度が低く、その使用を避けようとする傾向が見られる。これに反して、重文は早い時期に学習でき、自由英作文にも使うことができる。文構造の平易さから言えば、関係代名詞の場合も、重文構造を持つ非制限用法の関係代名詞のほうが学習し易いのではないかと推察される。

8. おわりに

実験結果からも、複文、とりわけ形容詞節の複文を日本人英語学習者が苦手としていることは明らかである。それにも関わらず、前述したように、*Taisho*以降の歴代英語教科書が、複文である制限用法の方を、重文である非制限用法より先に導入しているのはなぜであろうか。そして最近の教科書である *Sunshine* にいたっては、2つの用法の導入時期にさらなる開きが見られ、非制限用法の導入がかなり遅れている。使用しやすい重文構造を持つ非制限用法の関係代名詞を先に導入した方が、より負担が少ないと思われるが、*Taisho*以降の英語教科書の関係代名詞初出時期の調査は、全く逆の結果を示している。2つの用法の導入に関しては、むしろ *Drill* 教科書の方が妥当ではなかろうか。明治以降の英語教科書を計量的に分析した結果から、明治初期の輸入教科書のような「文法無統制型」ではなく、日本人 EFL 学習者の現状を配慮した「文法統制型」の方針が『正則』以来定着したかに見える。また、英語教科書は、文法項目の学習し易さを十分配慮して執筆されていることが、残された研究文献や資料などから窺える(小篠・江利川, 2004)。

しかし、本論のように、学習者による表出データを基にして文法項目の学習し易さを検証することは、未だ十分であるとは言えない。また、それらのデータに基づいた教材配列も行われてはいない。単に歴代の英語教科書の導入に関する考えを踏襲しているに過ぎないもの

もあるように見受けられる。

学習者の負担を少なくし、学習し易くするという意図で構成されている現在の英語教科書が、関係代名詞の導入時期の判断に見られるように、かえって習得度を低めている結果になってはいないだろうか。文法事項の導入順序が学習者にとって適切であるかどうか、「非制限用法」の導入に関する位置付けの点からも議論する必要がある。

注

1) 関係代名詞の制限用法と非制限用法の差異は、以下のような例文に顕著に現れる。

- a. The books which were written by foreign authors were burned.
- b. The books, which were written by foreign authors, were burned.

(Baker, 1989: 332)

しかしながら、どんな教科書もいきなり上記のような中埋め込み型の関係代名詞の導入は行わないので、本研究で論じるのは、いわゆる右枝分かれ型の以下のような関係代名詞である。

- c. He has three sons who became doctors.
- d. He has three sons, who became doctors.

制限用法であろうが非制限用法であろうが、通常最も簡単な構造を持つものから導入されることを考えると、導入の順番を論じる場合、必然的に上記の a や b ではなく、c のような制限用法の文を先にすべきか、あるいは、d のような非制限用法の文にすべきかを論ずることになる。したがって、本論では、これ以降、制限用法や非制限用法に言及する場合、c と d に限定することにする。

参考文献

- Baker, C. (1989). *English Syntax*. Massachusetts: The MIT Press.
- Bardovi-Harlig, K., & Bofman, T. (1989). Attainment of syntactic and morphological accuracy by advanced language learners. *Studies in Second Language Acquisition*, 11, 17-34.
- Crookes, G. (1990). The utterance, and other basic units for second language discourse analysis. *Applied Linguistics*, 11(2), 183-199.
- Ellis, R. (1994). *The Study of Second Language Acquisition*. New York: Oxford University Press.
- Hunt, K. W. (1966). Recent measures in syntactic development. *Elementary English*, 43,

732-739.

Mandeville, F. (2002). Syntactic Maturity, and T-Units

<http://www.ci.swt.edu/faculty/mandeville/RDG6330/HuntsT-units.html>(2004 年 11 月 29 日)

Nakamura, T., & Matsuoka, H. (2005). A quantitative analysis of English textbooks in Japan: The frequency of appearance of nominative relative pronouns. ICT in Analysis, Teaching and Learning of Language (2005 年 3 月) での口頭研究発表資料.

小泉敏江・山内逸美 (2003). 「日本人中学生のモノログにおけるスピーキングの特徴」『関東甲信越英語教育学会研究紀要』17, 33-44.

小篠敏明・江利川春雄 (2004). 『英語教科書の歴史的研究』 辞游社.

中村朋子・中尾有香・畑野喜信 (2004). 「擬似初心者の自由英作文に見る英語運用能力：中学校 3 年生・大学 1 年生上位者との比較」 35 回中国地区英語教育学会研究発表資料.